



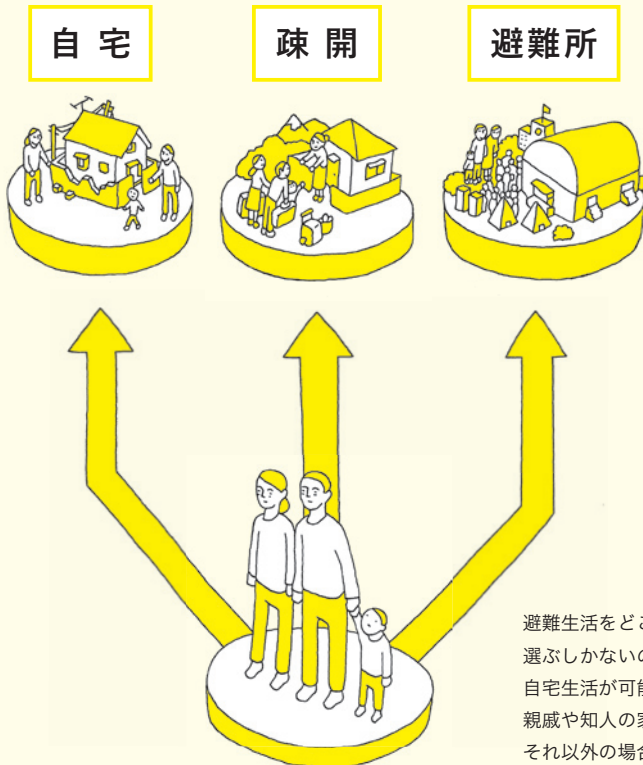
地震
イット
ノート

避難生活

避難の方法

1 避難所 2 疎開 3 自宅

地震直後の緊張状態がとけ、皆それぞれの立場から次の生活の場所が決まっていきます。家が無事な人は、自宅。家が倒壊、あるいは危険な状態にある場合には、親戚などを頼って疎開するという選択肢もあります。被害にあっていない土地に親戚などがあるかどうか、疎開させてくれる人間関係にあるかどうか。悩むところです。そしてそれができない場合、好むと好まざるとにかかわらず、避難所が生活の場になります。



避難生活をどこで送るか、状況によって選ぶしかないので、三種に絞られます。自宅生活が可能なのは非常にラッキーなケース。親戚や知人の家にしばらく疎開する例もありました。それ以外の場合は避難所ということになります。



知らない人の夜具のすそに入った

「知らない人の夜具のすそに入れてもらった」

「情けない！やめてよ！」と叫んで泣いた。取り合いをしていた人たちも我に返り、泣いた。

子供がいる、けがをしている、寒い、お腹が空いて動けない。それぞれに、真剣に、自分や自分たちの生きる方法を探す避難生活。ほとんどの人は、避難所へ逃がれました。その中で、時に罵り合うこともありました。人のやさしさに涙を流す人もいました。様々な事情を抱えた人たちが集まる避難所は、感謝したり、憂いたりしながら、人の温かさや偉大さ、愚かさや悲しさを知っていく場所でもありました。

情けなさに泣き始めた

「服の救援物資がきて、その中に一着だけきれいで良さそうな服が入っていた。それをめぐり取り合いになった。それを見ていた一人の主婦が『情けない！やめてよ！』と叫んで泣き始めた。取り合いをしていた人たちも我に返り、情けなさに泣き始めた」

避難生活 #1



地 震
イ ツ モ
ノ ー ト

避難生活

避難生活 #2

最初に 食べてるんやろ!

「1週間ほどして、物資が溢れてきて、みんなのわがままも出始めた。いっぱい持ってるのにまだ欲しがる人もいた。避難所の人たちの分の物資はあるのに、家にいる人たちの分はない……不満はスタッフに向く。配ってるスタッフ(学校関係者)が最初に食べてるんやろ!と言われる」(教育委員会の職員。救援物資を配ったりしていた人)

人間のいやな面がいやというほど出ていた

「避難所で一番大変なことはプライバシーがないことである。狭くて頭の上にとり人の足が……などということもありストレスはすごいものがある。地べたに寝るので埃がすごく、病気を持っている人などは余計に身体に悪いということもある。それぞれダンボールなどで自分の場所確保など考えていたがそれはそれでスペース取りの摩擦などもあり人間のいやな面がいやというほど出ていた。たえられない人は早々に外部へ出て行った。これも金銭的に余裕のある人にはできるがそうでない人は我慢を強いられた。受験生などいても、皆が協力している姿も見られたがチームワークができるまで時間がかかった。ただし、小さい避難所ではチームワークがとれたと思う」

一人になるのが怖かった

「一人になるのが怖かったので家の外でボランティア(カマボコ板に絵を描いて表札をつくって配る)を続けたことで心身症から抜け出した」

『これだけ感謝してもらえならもっと頑張ろう!』と思った

「雪の日。避難所に『家に住んでる人』たちが物資を求めてやってきた。運動場に長蛇の列になったが黙って並んでいた。配っていたら途中で物資がなくなる。『あと2時間でまた物資来ます』と言うと、おとなしく待つ人たち。自分だけ、我先にということも、取り合いもなかった。仏さんのよう。不思議。何でかな——と思う。ものすごく勇気づけられた。『これだけ感謝してもらえならもっと頑張ろう!』と思った」(教育委員会の職員。救援物資を配ったりしていた人)

不快なことはひとつもなかった

「自分がいた避難所は2000人ほどいたが、つねに協力、はげまし合い助け合いで不快なことはひとつもなかった。隣の人から『水ありますよ』と言ってもらったり」

10時になると電気が消える

「避難所では10時になると電気が消える。寝たくなくても電気を消されて、絶対に寝なアカん状態だった。声やセキが気になってしまった」





避難所をつくる

避難所はまさに生活の場。
居心地は悪くてもしばらくは
ここが住居。少しでも居住性を
よくするよう、いろいろな
努力がありました。



居住区と通路を 明確にする

「最初は、みんなが
ぎゅうぎゅうに入っていた。
しばらくして落ち着いてくると、学校の先生が
テープを持って、区画わけしてくれた。
そこにみんながきちんと自分の荷物などを
おさめるようになった」

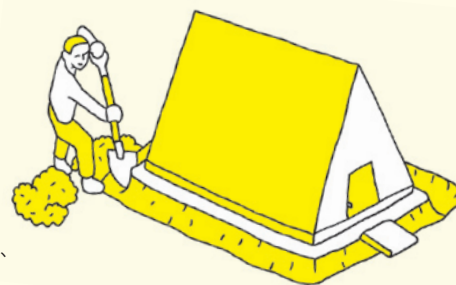
非常が日常に変わっていく、
避難所の共同生活。
共同生活を送ると思ってもいなかった人た
ちが、事情は違えど一つ屋根の下、雑魚寝に
近いかたちで生活をしなくてはならないのだ
から、それは大変です。しかも、水が足りな
い、食べ物も自由にならない、いくらでも問
題はある。ボランティアが外部から来て手
伝ってくれる、といっても万全というわけに
はいきません。解決するべきことは次々と起
きる。日常のことであればあるほど、解決に
は手間がかかったりするのです。

避難所での問題 #1

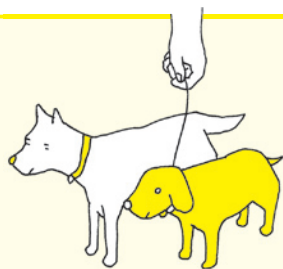
テントに 補強・工夫を施す

「テントは雨がふったら水浸しに
なるので、側溝を造っていた」

「自衛隊のテント村で避難していた。
雨戸や畳で風除けを作った。
ブロックで下地を作って畳をしいて、
下から吹き上げてくる風に耐えた」



ペットや病気

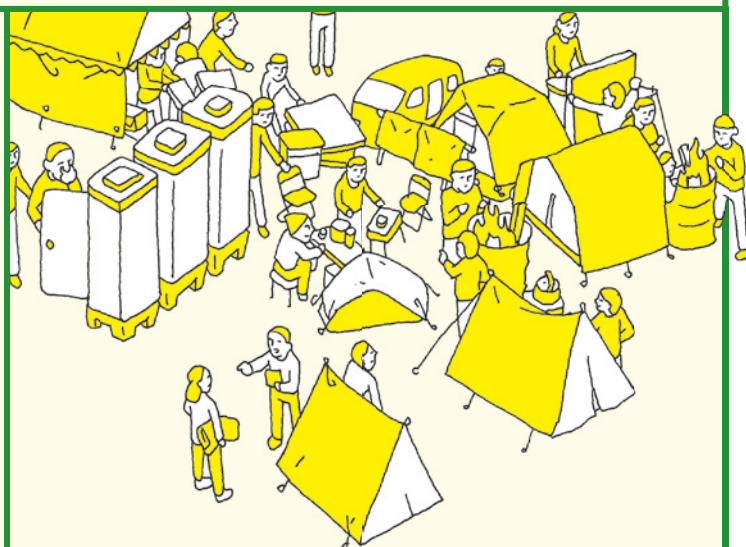


各家庭ごとに ペットと一緒に

「ペット……ほとんどは教室に入れて
いなかった。空き教室がたくさんある
避難所では、各家庭ごとにペットと
一緒に 教室に入ってもらっている
ところもあった。避難所の様子による」

持病のある人は 事前に 届けておく

「持病のある人は事前に
届け出ておく。例えば、
アトピーの人ならほこりの
少ない部屋へ入って
もらうなどの配慮ができる」





水が使えない

効率的な運搬方法、
無駄のない使い方……。
普段あたりまえに使っている
ものこそなくなった場合のことを
考えておく必要があります。



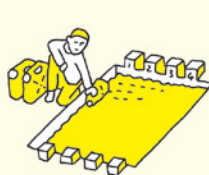
風呂の工夫

「お風呂はドラム缶で
お湯を沸かして、
お湯とお水を両方みんな
バケツリレーをして運んだ」

「お風呂は避難所には全然
無かった。電気が通ってから、
家で電気炊飯器で風呂の
残り湯をわかし体をふいた」

三杯のバケツで

「避難所で食器を洗うときは、バケツを
三つに分けて使っていた。一つ目のバケツは、
食べたすぐあとの一番汚れた食器をすぐもの、
それを二つ目のバケツできれいにし、三つ目の
バケツで仕上げをしていた。仕上げをした
三つ目のバケツの水はまだきれいなので、
野菜を洗うのにも活用」



衛生面の工夫

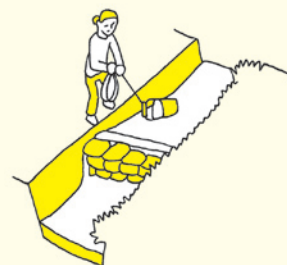
「衛生面から、食品用の
ビニール袋を使うと素手で
食べ物を触らなくてすむし、
ねぎなどは料理バサミで
切るとまな板を使わずにすむ。
料理バサミはウェットティッシュで
ふけばきれいになる」



海、川、プールの水を使う

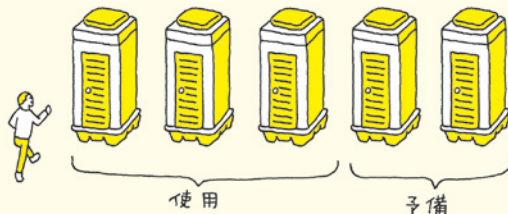
「池、プール、海の水を使っていた」

「川の水をせき止めて使っていた。
天気のいい日はあまり流れて
こないため、せきとめないと
使える量ではなかったから」



トイレが不便

数が足りなかったり、
管理が難しかったり、
トイレは深刻な問題です。
トイレがひどい状態になり、
行くのを我慢して、体を
壊す人もいました。みんな
気持ちよく使えるように
することが大切です。



丁寧に使う

「5個あった簡易トイレは3個だけ使うようにしていた。
5個全て使えとなると、乱雑に使ってしまうけど、
3個だけだと、丁寧に使おうとするから」



トイレを一から作る

「校庭の隅に穴を
掘ってトイレを作った。
プライバシーを守るために
ブルーシートで囲いを作っていた」





眠れない

プライバシーばかりを主張してもいられない。
でも、心身のバランスを保つためにも
睡眠はしっかりとりたい。
日常と非日常が混在した空間
——それが避難所の生活です。



暗いと寝れない

「寝るときに、明るくて寝れない人と、
暗いと寝れない人がいた。
今日はこの列の電気を消すと、
日替わりで消すようにした」

いびきがひどい

「いびきがひどくて
寝れない人には耳栓を
くばった」

ものが足りない

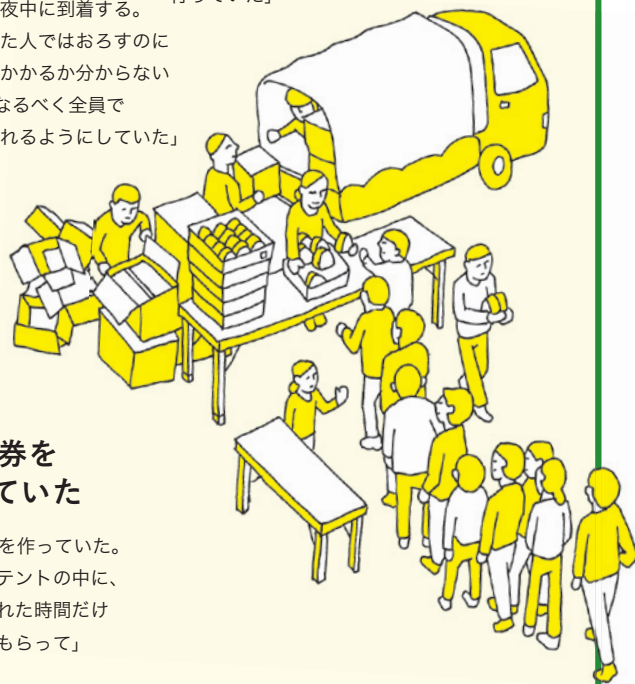
物資の配給が行われるようになると、
不公平の問題などが起きます。
互いを気遣えるかどうか、
人の本質が見えてきてしまう
瞬間があります。

他の避難所と 交換した

物資は夜中に 到着する

「物資は20tトラックに
乗って夜中に到着する。
限られた人ではおるすのに
何時間かかるか分からない
から、なるべく全員で
受け入れるようにしていた」

「軽トラと2tトラックを
貸してもらっていたので、
他の避難所と交換しに
行っていた」



配給券を 作っていた

「配給券を作っていた。
大きなテントの中に、
決められた時間だけ
入ってもらって」

食料が足りない

食料はボランティアの人が届けてくれたり、
自治体が用意したりしてくれます。
でもやはり絶対量が足りません。
種類も限られます。おのずと
ルールが必要になってきます。



炊き出しを した人が 食べられない

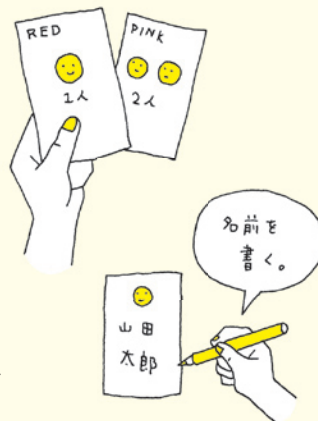
「はじめのころは、炊き出しを
作った人が列に並べなくて、
何も食べれないという状況があった。
しかし、炊き出しをした人が
一番にご飯を食べるようにすると
不満はなくなった」



ルールをもうける

「一人分は赤のカード、二人分は
ピンクのカードというように、カードを
見れば何人分かすぐ分かるように。
名前も書いてもらう。はずかしいから
何回も並ぶということはなかった」

「麺類が、500人のところ300食しか
なくても、半分にして小さいおつゆとして
出すと、みんなにあたるし気持ちもいい」





配慮が足らなくなる

弱い人、傷ついた人、病んだ人、
普段から配慮しなくては
ならない人たちのことを
忘れがちになることもありました。

女性への配慮

「女子更衣室を作った。
さらにその中も膨らませて
使う仮設で仕切った」

「体育館の中にも更衣室を、
避難している大工さんに作って
もらった。家からふすまをはずして
持ってきて、取り付けた」



病人・社会的弱者への配慮

「障害者や認知症の
方への配慮」

「避難所のお手伝いをして、
初期に、乳児のミルクをとく湯、
老人用オムツの無さに胸が痛んだ。
少数弱者のための物資供給
を急ぎたい」

「急病人、持病のある人は、
町医者や市民病院の看護婦さんが
職員室で応急手当をしていた」



避難所での問題 #4

統率がとれない

人間関係をスムーズに
するには、リーダーが必要だと
痛感することが多くありました。
ボランティアのコーディネートや
仕事の分担など、やはり
誰かが中心にならないと、
難しいです。



名簿を書いてもらう

「防災訓練のときは、
避難所の名簿を作るようにしている」

「『〇〇はいませんか?』と身内の方が
尋ねてくるが、呼ばれない人は
せつなかった。名簿を作り、
貼り出しておくとすぐに分かる」

「避難して来た人から
名前・家族・連絡先を書いてもらう」



心にゆとりを持つ

「レクリエーションも行った」

「避難所に取り出せた本を
持っていったら、
子どもが読んでくれていた」

「喫煙所を作った」

リーダーを決める

「体育館・テニスコートなど8つの班に
分けて各班のリーダーが毎晩ミーティング。
連絡事項を話し合い(要望・物資の配給・
ボランティアのコーディネートなど)」

「仮設住宅ボランティアでは、
リーダーシップをとるために
目立つ格好をしていた。
赤い帽子のお母さんで通っていた」

「若者は新撰組として避難所の
中の見回り。年配の人は見回り組として
避難所の外を見回りしてもらっていた。
何か見つけても絶対に自分たちで
手を出さずに報告に来ることが約束」

「お酒は禁止(酔っ払うと乱れるから)」